

---

# 無題

atsushi\_1111

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無題

### 【Nコード】

N6132V

### 【作者名】

atsushii1111

### 【あらすじ】

転生や死後、来世……そんなことが科学的に証明されてしまった世界。

どこよりも深いそこへ、人は到達すべきではなかった。

仮に、そこに全ての答があつたとしても、だ。

たとえるなら 深海。

どこよりも深い場所であるがゆえに、冷たく、暗く、そして寂しい。そんな場所で独りになった時、ようやく人は誰かを欲する。手を繋ぎたいと思い、温もりを感じたいと願い、想いを通じ合わせたいと泣くのだ。けれどそこはどこよりも深い場所 人は、人を見つけることができない。手を伸ばしても何かに触れることなど叶わないのだ。水圧に押し潰されて、小さく縮こまるばかりだ。そこは人が生きていくのに適していない。誰もが、広い宇宙で一人ぼっちのように、膝を抱えるのである。

孤独の海。

人が知ってしまったのは、そういう領域。

そこに至って初めて思い知る。

安全な浅瀬で遊んでいれば良かった、と。

曇天を、青年は見上げた。

空の際まで見ることはできないが、それでもそれが地平にまで達していることは予想できる。辺りは冷たいコンクリートで生い茂り、それは天へと唾を吐きかけるように高々とそびえている。そして隙間を埋めるように、感情の欠落した人々が徘徊している。どこに目を向けても暗色ばかりが目につき、それは心にまで暗い影を落とす。鮮やかな色の草花や派手な格好をした若者、色とりどりの配色が施された街並み。その全てが灰色に見える。結果、さらに心が淀んでいく。不の連鎖が、果てしなく続いている。どこまでも伸びている舗装された道が、そのいい証拠となるかもしれない。きつとどこに行っただとしても、この景色は変わることないだろう。それだけ、世界は腐っているのだから。

青年 石動真之いすのまことは嘆息する。疲労を感じていた。足は痛いし肩は重い。歩くことが億劫。できることならその辺のベンチで、数分でもいいから、休憩を取りたいところ。

月に一度のペースでまとうダークスーツ。その下には白のシャツと黒いネクタイ。

知人の葬儀の帰りであった。中学時代の同級生で仲はそれほど親しくはない。同じクラスになったのは一度だけで、部活動も委員会も、高校進学だって別。座席だって近くになったことはなく、会話

も、ほとんどと言っていいほどない。彼との接触は皆無に等しい。だから彼に関する記憶の量はとても乏しく、ゆえに儂い。何かを思い出そうとしても形を成しはしない。どれほど深く遡ったところで、実を結ぶことはない。

下を向いていた真之は正面へと視線を上げる。

目の前を数人の男女が固まって歩いている。彼らも中学時代の同級生だ。幾分仲の良い同級生。今は、彼らと少し遅い昼食を取ろうと駅前のファーストフード店へ向かっている途中である。誰も彼もが和気藹々と談笑しつつ歩を進めている。彼らの表情は、久し振りの再会ということもあるせいかな暗い翳は見られない。

その集団の中で天気と同じ様相を呈しているのは、後ろを歩く真之一人。

傍目からすれば彼一人が異質であった。一人だけ打ち沈んでいるのだ。周囲は楽しげであると一見してわかるのに、彼の存在がその空気を重くしている。不協和音のように、それ一つが全てを台無しにしている。

だとしてもそれに、その原因に、気付く者はいやしなない。

「真之、どうしたんだよ」前を歩く一人が、少し遅れて歩く青年に声をかける。

「ん？ あ、いや、何でもないよ」真之は取り繕って、彼に応じた。

その時にはもう、真之の面上にも翳は見られなくなっていた。友人達と同様、笑みを浮かべている。みんなと話して心を弾ませてい

るかのような明るい表情。過去も未来も些事だと言わんばかりの、無邪気な笑顔だ。

嘘で塗り固めた表情。

真之は嫌悪する。

友人の葬儀に、彼らはずいさきほどまで参列していたのだ。にもかかわらずその事実は彼らの態度には見られない。

それは異常とも言えることなのかもしれない。普通なら誰もが悲しみを面上に浮かべるものだからだ。たとえそれが偽りであったとしても、そうしなければならぬ空気というものがある。そしてそれは尾を引く。まさに今の真之がそうであるように、体に重く押し掛かり、その足取りを遅々としたものに変える。一瞬だ。一瞬で心を蝕み、やるせない気持ちにさせてしまう。それほどまでに強力な悲しみを植え付けてくれる。深く根が張り、それが枯れるまで、とにかく現実から目を背ける。そうやって癒えるのを、待つのだ。間違いない、人の死というのは哀しい。世間一般で通用するはずのステレオタイプだ。

なのに、彼らはそれを否定している。彼らの頭には亡くなった者に対する何かは微塵もない。そんなことは些末なことで、今はそれよりも会話を楽しんでいたい。彼らの頭にはそれしかない。頭の中を覗かなくてもわかる。

それが普通だから。

だから、そこで異常なのは、真之のほう。

そうこうしているうちに、目的の店に辿り着いた。中学時代に足繁く通っていたファーストフード店へ皆で入っていく。

懐かしい店内に、しかし真之は懐かしむ気分にはなれなかった。店内は喧騒に包まれていたが、その音の波はどこか遠い。薄い紙一枚を隔てた向こうから聞こえてくるようで、それは、自分一人がぼつんとその場に取り残されてしまった感覚に似ていた。

真之は機械的に注文をし、金を払う。注文したのは、一番小さなサイズの飲み物。それを受け取り、友人らが陣取っている席へと向かう。空いている椅子に、真之は腰を下ろした。

「いやー、みんなでここに来るのって、何年振りだろうな？」

一人の呟きに、全員が食らい付く。

「そうだな。四、五年ってところか？」

「あ、わたしは先週も来たけどね」

「え？ そうなの？ ちょっと俺も誘ってくれよ」

「やだよー。彼氏と来たんだもん。何でアンタを紹介しなくちゃいけないのよ」

そんなどうでもいい会話に、真之は愛想笑いを浮かべ続けていた。

誰も 本心に誰も、故人を偲ぶ言葉は出てこない。それは自身も同様であり、その現状に浸っている自分が堪らなく嫌になる。だがそれ以上に、この現状が日常であることに、堪らなく吐き気がす

る。

どうかしている。

「いつらも、この国も、この世界も……みんな、どうかしている。

「どうしたんだよ、真之」

と、友人達が揃って一人を見つめていた。

何の興味もない瞳で。

真之は笑って誤魔化す。「え？ 何がだよ？」

「いや、ボーっとしてたからさ」

「そう？」

女友達がうんうんと頷く。「そうだよ、どこか上の空って感じ」

「お、上の空なんて言葉知ってるんだ」と友人の一人が茶化した。

その言葉に、皆が笑った。

「どうしたんだよ恵美、お前、本当に恵美か？」

「スゲー馬鹿だったのに、何があったんだよ」

「ちょっとー、わたしだってそのくらいの言葉知ってるから！」

もう、誰も真之を気にしていない。

そんな彼らに向けて、真之は微笑を湛える。

そして胸中で言葉を吐くのだった。

本当、反吐が出る。

それは、ずっと昔の話。

何十年も、何百年も前の話だ。

世紀の発見。

生まれ変わりの科学的証明。

具体的なことを一般人は何も知らない。科学者でさえ、それを正しく理解できている者はほんの一握りだという。

だがそれは紛れもない事実であり、発見当初は誰もが例外なしに半信半疑であったもの。というより否定的であったが、しかし長い歳月を経て、それは世界の常識となった。なってしまった。子供でも知っているくらいに。知らないのは生まれたての赤子や未開の地に住む部族くらいなものだろう。それほどまでに、それは揺るぎない事実として認知されている。

それが世界に浸透するまでの過程で、様々なことがあった。

まず、食糧危機があった。

あまりに増え過ぎた人の数。それに対応できるほどの食料を世界は持ち合わせていなかった。人々の前から食料が徐々にその量を減

らしていき、十数年を経た頃、その事實は誰の目にも明らかなものとなっていた。食糧問題はそれまでも世界中で叫ばれていた。しかし万人の心には届かず、結局、取り返しの付かないまでに問題が露呈するまで、それは放置されていたのである。

そして問題の深刻さは加速していく。

不安を覚えた人々は我先にと食べ物 unnecessary に独占し、そうしてコンビニやスーパーから食べ物という食べ物が跡形もなく消え去った。食べ物を得られなかった人々は、いつまで経っても満たされない空腹に恐怖し、苛立ちを覚えた。善人が暴徒と化するのにそれほど時間は必要としなかった。飢えた人々は店を襲い、隣人を襲う。農家などが管理する田畑も荒らされ、それは自らの首を絞める結果となった。

火急の事態に国としても様々な対策を講じた。特に期待されたのが国外からの援助であったが、しかし、多くの国々が似たような惨状であった。食料自給率が潤沢な国は、最初こそは援助に乗り気であったが、やがて、その不穏な空気に毒されるのを懸念して援助を一方的に絶った。それは仕方のないことで、余剰生産物はすでに底をつきかけており、それ以上の支援は自国を危険に晒してしまうからだ。

だがそれは戦争へと発展していくこととなってしまった。

持たざる国が、持つ国を襲っていく。大多数の国々が貧困に喘いでおり、食料がある国はごく少数。群がる貧困国を振り払うのは困難であった。無数に伸ばされた手はどれも枯れ枝のように細くとも、しかしその一つ一つが邪mana力を持っており、それは、肥沃な大地を穢していく。その姿は、国内における暴徒が田畑から勝手に食べ

物を奪っていく様に酷似しており、それは同様の結果を貧困国にもたらした。

どちらも必死だった。貧しい国は国民の現在を癒すために。富める国は国民の未来を守るために。どちらも正義であり、もちろん、どちらも悪であった。

そんな時代が何十年も続いた。

経済は当の昔に崩壊し、恐慌が暗雲のように全世界を覆っている。世界中の大都市はスラムと化し、荒れに荒れる。餓死者がそこかしこに見られ、きちんと埋葬されない彼らから疫病が蔓延する。それによって餓死だけでなく病死も数え切れないほどに上る。

とにかく、人が死んだ。

これでもかというくらいに。

数十億の人口は十億にまで減少した。

そこでようやく目が覚める。

悪夢が終わった。

だがその時 世界に一応の平和が差し込んだ時、彼らの意識はすでに過去のそれとは大きく違っていた。

彼らが一番に行ったのは、復興政策ではなく、とある法を変える、ないしはその法を生み出すことだった。

## 死刑制度の推進。

今まで死刑に対して反対姿勢を見せていた多くの国々は、こぞつて死刑制度の導入を試みた。それは犯罪抑止のためでも凶悪な犯罪者を排除するためでもない。犯罪者に食べさせる物などありはしない。そんな理由で彼らを殺す。

単純に人の数を減らすための制度。

その程度の認識。

先の大戦を引き起こした主因である食糧危機 平和な社会において、人々はその数に過敏となっていた。様々な政策が施行されていった。

だがそれでも人の数は増えていく。

すると今度は些細な理由でも処刑されるようになった。凶悪な犯罪に手を染めずとも、例えば窃盗や交通違反など、それだけで人は死刑に値するようになってしまった。

それに異を唱える者は本当に少なかった。

食糧危機が人々の念頭にあつたからというのもあるが、それ以上に、ある事実が、彼らをその道へと導いた。

人は死んでも生まれ変わる。

政治家や科学者などが声高に叫んだ。彼らはそれを武器に自身を正当化する。そうして死の法を彼らは確立させた。

その頃には、人は生まれ変わるといふ事実を、人々は当たり前前の知識として持ち合わせるようになっていた。

それから何十年も経て、人々は、大戦以前の生活をようやく取り戻すことができた。だが全てが元通りというわけでもなかった。それは法においてもそうであるが、何より、そこに暮らす人々の意識そのものが根本的に変わっていたのだ。

人は、簡単に死ぬようになっていた。

以前からも、人は本当に簡単に死んでいた。事故や病気などで、何の前触れもなく人は死ぬ。だがそれはほんの一握りの人間だけが知りうること。

それが公知となってしまうた。

だがそんなことはどうでもよかった。

変わったのは、そんなことではないのだ。

大きく変わってしまったのは 人の、生への執着。

死は望んでやってくるものではなく、むしろ、向こうが勝手にやってくるものだ。自殺大国と謳われていた国でさえ、死をやむを得ず選択する者は多くとも、死を心から望む者は限りなく少なかったはずだ。

だが現代において、死は、望むものとなってしまった。

ちよつとした嫌なこと、大したことのない失敗、何となく……。

そんなことで人は死を選ぶようになってしまっていた。

どうせ生まれ変わるんだから。

彼らは揃ってそれを口にするという……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6132v/>

---

無題

2011年11月15日23時37分発行